

III 日本語教育と私

わたしにとって 日本語教育とは何か

阿部葉子

■ 1. 動機文

1.1. 「なぜ私は日本語教育をめざすのか」本文

筆者は、日本法人の出向や企業内転勤で来日したビジネス関係者の日本語クラスを担当している。学習者は「ビジネスパートナーと直接コミュニケーションをはかりたい」「日本語能力が企業の評定の対象であるため」と具体的で高い学習目標を設定している。しかし、日本滞在が長期で、日本語能力が向上しても、仕事で接触する日本人の行動や考え方に対して、「日本人は率直に話すことを避ける」「日本人の結論の出ない会議のやり方は問題だ」「日本の会社は社員に犠牲を強いる」など否定的な意見を日本語の教室で表明することが多い。このような学習者の認識は会社組織に面と向かって議論されることは少ないだろうし、また組織側からも説明のないままに、学習者は固定的な日本人や日本の社会のイメージを持ち続けているのではないかと思う。

外国語を学習すると、その文化や社会の理解は当然深まると私は思ってきた。日本語は必要とするが、否定的な日本人観また社会観を持つ学習者に教師は何ができるのか。教室でこのような話題が学習者から表明される意味は何かを考え始めた。学習者は限られた学習の経費と時間の中で「より早く、より効果的に、成果が実感できる授業」を求める。これまで、私は言語スキルや日本の社会や文化についての情報知識を求められれば、それにいかに応えるかに懸命になっていた。教師は学習者の仕事や生活に直結すると思う日本や社会の情報知識を選択し、教材化し、学習者は与えられた教

材を読んでいく。しかし、日本の文化・社会を理解するというのは、日常生活で学習者自身が見る日本の文化・社会の事柄に対して「なぜそうなのか」と考えることから始まるのであり、このような問題意識の芽を育成することに私は目を向けていなかった。学習者には、いくら知識として日本語を学習しても、使えるようにならないとしながら、いくら日本文化を情報知識として効率よく一方的に与えても、日本を理解することには繋がらないことに私自身なかなか気づけなかったのだ。

このような話題が学習者から日本語の教室で表明される意味は何か。学習者が自分の文化と異なる仕事の習慣や周りの人々の考え方に接して、沸き起こる感情や考えを表現していくことを教室が支援することではないだろうか。学習者にとって、日本語は仕事や日常生活で情報を伝達する手段であるが、異なる習慣の人々と対人関係を作り上げていく表現の手段でもある。学習者の周りのさまざまな事柄を自分自身の眼で捉え、感じたことや考えたことをことばにして相手にぶつけ、相手から意見を受け取り、また考えるという、自分と他者の間でことばによるコミュニケーションのサイクルを作ることが仕事をする上で不可欠だろうと思う。このような表現活動を方向付けることが教師の役割であり、学習者は情報知識からではない、自分自身の眼で文化を探る方法を身につけていくのではないだろうか。

学習者が固定化したイメージから解放されて、学習者自身が日本の文化や社会を自ら探っていくことをどのように支援するかを、筆者は考えていきたいと思う。「私にとって、日本語教育は学習者が日本の文化や社会を自ら探っていく表現活動を支援すること」である。

1.2. 動機文をめぐるインターアクション

入学事前レポートの動機文「私にとって日本語教育とは何か」は誰に向かって、何のために書くのだろうか。動機文の目的は、研究室のメンバーに筆者自身が日本語教育のどのようなことに問題意識を持っているかを伝えることであり、メンバーに伝える過程で、理解と共感を得ることが必要である。最も大切なことは、研究テーマに結

びついていく問題意識を自分自身に明確に説明することである。しかし、はじめに書いた動機文は問題意識が伝わりにくく、共感を得ることができなかったため、再び動機に向き合うことにした。

「今、日本語教育に向き合うにあたって、もっとも気になることはなんですか」
(村上さん)

「自分の主張や今までの体験を述べるということだけに留めず、このように考えている私はどうして存在するのか、という様に視点を変えると対話に入りやすく、自分自身の内面ももっと表現できるのではないですか」(サーシャさん)

第一稿は筆者が日本語教育でかかわってきたことを時間軸で振り返り、結論として「日本語教育は自己と世界を探る表現活動の支援」としている。このとき、考えていたのは、「人はどのように学ぶのか」という大きな問題意識から実践を振り返ることであり、教師の学習会である「新しい活動に加わった」ことがこのような意識を持つ方向づけをし、従来、こなしているように思っていた教室のさまざまなものを自覚的に捉えるきっかけになったという点だった。学習者はなぜ日本語を学ぶのか、教師はなぜ日本語教育をするのかという問いを「学びとは何か」という観点から明確したいと思った。第二稿は教室の実践を通して、わき上がった問題意識から書き出し、実践の中で気づいた教師としての思い込み、そして目指したいと思っている実践、結論へと進めている。この問題意識は個別的で、筆者が教室で改善したいと考えていることである。第一稿も第二稿も筆者の問題意識であるが、どのように関連しているのか明確にことばにすることができないでいた。

1.2.a 小さな問題意識と大きな問題意識

「その伝わってくるものの原点、思考のプロセスを明確にしたら、もっと読み手に伝わるのではないですか。・・・第一稿目から第二稿目に至った過程を含め、もう一度問題意識を整理したらどうですか」(狩野さん)

実践を問い直すためには2つの視点、「小さな問い」と「大きな問い」を持つこと

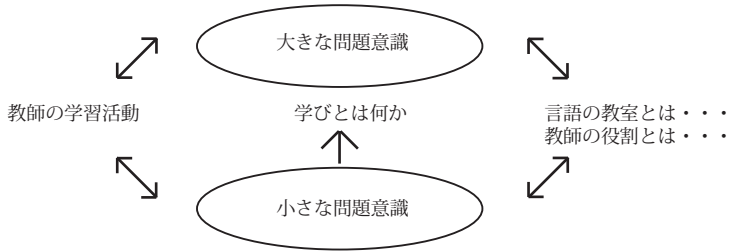


図1 小さな問題意識と大きな問題意識の関係

が重要だということを思い出した。「高い到達目標を持つ学習者がなぜ否定的な文化認識を持つか」という個別的な小さな問題意識は、「学びとは何か」という大きい問題意識から問い直すことによって、教室のさまざまなものが検証され、言語の教室は何をめざすのかが明らかになるのではないかと思った。そして、次のように整理を試みた。

1.2.b 結論の再定義

「ところで、第二稿でどうしても気になるところがあります。最後の『わたしにとって』の結論です。「私にとって日本語教育は自己と世界を探る表現活動の支援」と表現したものを第二稿で「学習者が日本の文化や社会を自ら探っていく表現活動を支援すること」と変更しましたね。この変化がよくわからないのです・・・」
(村上さん)

第一稿の結論は、日本語を学習する人たちが学ぶことは、異なる考えを持つ他者と対人関係を作る過程で、異なる社会に生きる自己とは何かと自己に問いつつ、自己をとりまく他者とは何かを問う表現活動と考えた。

再び考えてみた。インドシナからの定住者、南米からの労働者、ビジネスピープルなど世界を移動する人々は、異なる社会で不安、違和感を経験しながら、そのように感じる自己とは何かと自己に問いつつ、他者とのコミュニケーションを通して、新たな視点を取り入れ、自己を構築しているといえる。学習者が最も必要としているのは、自己の考えを他者に伝えるコミュニケーション活動によって、信頼ある人間関係を作

り、異なる社会においても自己の立場を持って生きているという実感ではないかと考えた。そこで、筆者にとって日本語教育は「学習者が日本の文化や社会を自ら探っていく表現活動を異なる文化で生きていくためのコミュニケーション能力として支援すること」と再定義し、対話をはじめることにした。

■ 2. 動機内容をめぐる対話

多くのビジネスピープルは日本語学習の目的を日本語で仕事を行うのに必要なコミュニケーションスキルを身につけるためという。学習者が求めるコミュニケーションスキルとは、さまざまな仕事の場面で必要とする情報の伝達手段として、また日常生活や仕事上の人間関係を築いていくために日本語が必要であることを意識して言っている。言語と文化は一体をなしているが、学習者はことばの言語運用技術として日本語を求め、教師もまた、文化の学習は、学習者の関心やニーズに合わせて、日本の社会や文化の情報知識を与えることと考えてきた。しかし、日本語能力が高くても、日本人や日本の社会や文化に対して否定的な認識を発言する学習者に出会う。「『日本語は学ぶが、日本は好きじゃない』ということはある。ことばは道具だから」という考え方もある。言語は習得するが、その文化理解は深まらないということはあるのだろうか。筆者はこのような問題意識を説明して、対話を始めた。対話者、Tさんは定住者、年少者、留学生などさまざまな人に日本語教育を行っている。ここ数年、筆者と同じ教師チームでビジネスピープルの教室を担当している。

2.1. 学習者の日本や日本人に対する否定的な認識をどのように捉えているか

学習者にとって、教室は教室の外で味わうさまざまな体験を担当者、仲間の学習者がいっしょに向き合う場である。たとえ、固定的なイメージであろうとなかろうと自分の見たり、感じたりする日本や日本人を話題にし、それに対する教室で起こるさまざまな反応とことばのやりとりを通して、自分の日本や日本人に対する認識の裏づけ

をとろうとしているかのように見える。

◇ 以前、Tさんと、日本語力はかなりあるけれど、日本や日本人に対して否定的な認識を持つ学習者の存在について話したとき、「学習者に言わせることが大事だ」「学習者はいろいろな人に同じ話題をぶつけて反応を見ていなのだから」とおっしゃっていましたね。これは文化を理解するプロセスと考えていいのでしょうか。

— 自分とは違う社会や文化を批判的に見るのは当たり前のことで、批判することで、自分の論を組み立てているのだと思うんですね。それはおそらく、自国の文化に対しても同じように批判的に見ることがその人のやり方になっているのではないかと思います。たぶん、今、批判的に見ている日本文化を、実は自分の国に帰ったとき、肯定的に語ることもあるのではないかと思います。日本でいろいろな人、出来事に出会い、日本の社会で泳いでいるうちに、批判的に捉えていたものが変容することは十分にあり得るでしょう。

◇ なぜ、変容するのでしょうかね。

— そこをいつも考えています。こんなことがありましたね。私がか何かコメントを求められ、「～じゃないかと思います」と意見を言ったとき、学習者の顔が曇って、聞いてきたのです。「なぜ、確かに思っていることなのに、『～じゃないかと思います』と言うんだ。日本人はいつもそういう言い方をする」と。そして、「日本人は曖昧だ」と結論づけているのです。そこで、私は『～だ』『～と思う』でもいいけれど、わたしはあなたに対する礼儀を示した。私の意見がいちばんいいという言い方を避けた」と説明したんです。その人は「そんなことは誰も教えなかった」と言っていたんですが。だから、学習者自身に沸々わいてくることから始まって、いろいろぶち当たり、いろんな人に反応を聞き、納得したところで、変わっていくのだと思います。

◇ では、教室活動の中でこのような発言をどう扱いますか。

— 日本語教育として支援できるのは、学習者がぶつかる問題を自由に話す場を作ること。稚拙でもいろいろな意見を出し合う、それが面白いという場。一つの国民であっても、意見が違う。家族でも違う。伝えるという機会を私たちは学習者に与えていないでしょう。それから、もうひとつは、批判に耳を傾けてもらうためのコミュニケーションの方略としての日本語をいっしょに考えるという両面から考えた方がいいと思います。現実の場面では、日本の社会を批判する外国人は概し

て日本人にとって心地よくないコメンテーターとされてしまうから、自分と反対意見であっても、また批判であっても、当を得た批判としてきちっと相手を納得させることが重要じゃないかと思います。

Tさんとの対話で興味深かったのは、学習者が批判的に周りのさまざまな事象を見ているという点である。学習者はさまざまな情報知識を無自覚に取りこむのではなく、自分との関わりで捉え直す方法を自分の文化でも、また異なる文化でも行っているという指摘である。しかも教師のあずかり知らぬところで、現実の社会活動を通して文化理解は深まっているのではないかとしている。

さらに、「国民であっても意見が違う。家族でも違う」、人は一人一人が個別の視点を持っていると言う。個別の視点とは、人は一人一人、国、民族、地域、職場、学校などのメンバーとして無限の属性を持ち、無意識のうちに取り込まれた知識や経験によって作り上げられたその人固有の捉え方・見方と考えられる。たとえば、ベネズエラで生まれ、父の国ドイツで幼年期を過ごし、母の国米国で教育を受けたユダヤ系の学習者、また、中国系カンボジア人の両親の間に生まれ、タイの難民キャンプで育ち米国に逃れた学習者など、その人しかできない方法でさまざまな場面を認識している。だから、その認識が発言されたとき、聞く私たちは興味深くその人を味わうことができるのだろう。しかし、学習者は異なる社会を理解していくプロセスをどのように自覚するのだろうか。

2.2. 文化を学ぶこと

- 文化と言語は本質的に一体をなしているものだけれど、教室に学びに来る人はことばを学びたいと思って教室にやってくるのではないかということです。しかし、批判しながら、感動しながら、言語活動していくうちに日本のいろいろな面を学んでいることがわかります。どのように伝えたらわかってもらえるのかと現実の社会でもがいているうちに変わってくる場合があります。反論しかくられないだろうなという言い方をしていた人が、主張したいことがきちっと伝わるようになることが言語面でも文化面でも理解が深まっていることじゃないかと思う

のです。私たち教師は、学習者それぞれが仕事や日常生活でぶつかっていることを自分らしくいかに話させるかを考えて、そのような時間を与えることが必要じゃないでしょうか。

Tさんは対話内容のレジュメに目を通し、「文化を学ぶこと」について語った。確かに、学習者が教室に来る目的は言語の学習である。しかし、学習者は日常生活や仕事で出会う出来事、人々を通して、自覚はしていないかもしれないが、異なる他者に対して「なぜそうなのか」という問題意識を持つ。担当者はこの「もがいている」視点を注目し、学習者自身の認識を自覚化、言語化する活動を通して、学習者が異なる社会の本当の姿を掴む力を育てることができるのではないだろうか。「文化を学ぶ」ことは、このような表現活動の中で自覚されるのではないかと思う。

2.3. ことばの学習は「生きる力」となるか

成人の学習者はいつも母語ではできないのに、日本語ではできない自分にはがゆさを感じ、日本語で伝えることのできる自分を今、少しでも実感したいと教室にやってくる。いつ使えるようになるのか保証のないゴールに向けて知識を積み重ねていく学習ではなく、今ここで話していることが伝わっているという手応えを感じられる教室をめざしたいと筆者は考えている。Tさんとの対話の中になんども「自分らしく表現する」ということばが繰り返される。「自分らしく表現する」ことは「生きる力」になるかという点を掘り下げたいと思い、尋ねた。

◇ ビジネスピープルが自分と違う考え方ややり方をする人と一緒に仕事をするには、周りのやり方に同調したり、受容するというのではなく、どのように摩擦や違和感に対処するかという力が必要ではないかと思うのです。「自分らしく表現する」ことは、ビジネスピープルが異なる社会で「生きる力」になりますか。Tさんは「いかに自分を出すか」ともおっしゃいますよね。

— 学習者は日本語で情報伝達がうまくいけばいいと思っています。私自身「生きる力」になるかどうかは教師として見届けられないし、そこまで求めなくてもいいのではないだろうかと思います。このような到達目標を持つと教師自身が苦し

んでしまう。学習者が本当に自覚するには相当な時間がかかるからです。でも、教室は自分を受け入れてくれ、自由にことばにすることができる場であり、いっしょに学習に参加する人、教師の間にいい関係ができあがってくると、ここは「私らしく表現できる」場だと感じ、そのような意味で「生きる力」を育てることになるのかもしれない。ことばのやりとりの繰り返しによって、お互いに何らかの生き方を発信しているのではないかと思います。

日本語教師は、学習者とのことばの学習を通して、学習者の「生きる力」を保障することができるのだろうか。しかし、もし、学習者が何を伝えても、理解されない、何を伝えても、受け入れられないとしたら、ことばに対する信頼を失い、学習者は「いつわかるようになるのか」「いつわかるようになるのか」と教師に問うだろう。人は何のために表現するのかといえば、自己の存在を他者に表明するためといえるだろう。逆に、沈黙は思考する自己は存在するが、他者への働きかけを停止し、他者との対人相互作用を求めない生き方であろう。すると、「生きる力」は考えている自己を表現することによって、自己の存在を確かめることであり、他者とのコミュニケーション活動によって表現したいことを表現する自己になっていくことと考えられる。コミュニケーション活動は、自己と他者が個人と個人のそれぞれの視点から率直な認識を伝え合う関係を築くことによってはじめて成り立つと思う。もし、学習者が言語運用技術としての学習のみを求め、教師がその期待に応えようとするなら、学習者が「できた」か、学習内容が「入ったか」が問題となり、「表現したいことを表現できる自己と他者の関係を築く」力を育てることばの活動から遠のいてしまうことになる。

2.4. 自分らしく表現する教室活動

「自分らしく表現する」教室とはどんな教室だろうか。どのような実践によって、実現できるのだろうか。その場合、筆者は「教える」ということを放棄できるだろうか。教室は語彙や文法を教え、間違いを直す場でもあるという潜在意識が筆者のどこかにあるような気がした。Tさんはどうなのだろうか。

◇ 「自分らしく表現できる場」とはどんな教室活動ですか。それは教師が「教えること」を放棄すると捉えていいと思いますが。

— 忘れがたいクラスがあります。どちらかというといつも聞き役の学習者なんですが、教室で映画が話題になると、その学習者の映画配給という仕事が照らし出され、その人はことばを探りながら、日本で公開になる映画の話についてクラスで話すんです。私も学習者の意識に耳を傾けながら、その人の表現したいぴったりのことばは何かといっしょにことばを探します。他の学習者は伝わっていないことばの意味をやりとりします。そして、だんだん映画の話ならあの人に聞けばいいと、一目を置き、その学習者は繰り返し映画についてクラスで話すという経験を通して、自分にとっていい映画とは何か、なぜ映画配給の仕事をするようになったかを話すようになります。さらに「撮影する」「上映する」「試写会」など必要なことばを使うようになります。他の学習者も自分しか話せないというトピックを持っているはずですよ。それは何も、ビジネスピープルだから仕事のことというのではなく、日常生活の中で感じる問題でいい。でも、必ずそれだけでは納得しない学習者が出てきます。教師は表現ができたと評価しても、学習者はしゃべっただけだと思ってしまう。まちがったときは直してほしい、表現は正しいかと言う。その時、私は躊躇せず教えますが、大切なのはあくまで学習者のコミュニケーションに必要な文法や語彙ではないかと思っています。

「自分らしく表現する」実践は、学習者が他者とのやりとりの中でことばを生み出していく過程にまなざしを向け、また、言語の教室にこのような関係が起ることをTさん自身がよいとしている場である。学習者は、いつか話せるようになりたいと思っていることが引き出され、他の学習者や教師の相互作用を受け、自分のことばが伝わったという実感を持つのだろう。津田さんは、教師は「教える」、学習者は「教えられる」という教室にある関係を越えようとしていると感じた。

2.5. 情報をどう学ぶか

ビジネスピープルは来日前、また来日直後、日本でビジネスする上で必要な日本に関する情報や知識を入手し、日本におけるビジネスや仕事をする日本人に関してさまざまにイメージする。特に、日本の経済低迷と企業文化に対するメディアの批判をそ

のまま発言しているようにも思える。そのイメージは、来日後の社会活動を通して修正、更新されることもあるが、固定的なイメージとしてますます強化される危険性がある。また、日本語学習の教師、学習者という関係性の中で、教師の画一的な見方がかえって学習者の個別に持つ視点を覆い隠してしまうこともある。従来、日本語学習で扱っていた日本の社会や文化に関する情報はどのように扱ったらいいのだろうか。

- ◇ 日本の社会や文化に関する情報はどう扱いますか。学習者が自分で異なる社会に対して問題意識を持ち、検証し、発見するというプロセスと、情報をどう学ぶかという学び方は切り離せないのではないかと思います。
- 「日本人はこんな発想をします」という情報をズバリ与えることも企業文化をスムーズに理解するのに必要じゃないかと思います。日本の文化や社会の情報を得たいと思っているビジネスピープルに情報知識を与えないというのは現実的ではないでしょう。すべて日常生活から自分で観察し、気づくという流れで文化の学習をすることは不可能ではないでしょうか。

Tさんとの対話では新しい気づきを与えられ、また共感できるものが多くあると感じている。しかし、腑に落ちなかったのは「日本人はこんな発想をします」という情報が「文化をスムーズに理解する」のに本当に役に立つのだろうかという点である。学習者を「自ら探る眼を持った主体的な存在」と捉えているのなら「こんな発想をします」という画一化した情報は不必要ではないだろうか。あたかも典型的な日本人がひとつの発想で仕事をしているという集団としてのイメージを押し付けてしまわないだろうか。

- ◇ 教師が「日本人はこんな発想をします」と言うと押し付けてしまう。大人の学習者だから情報だけ提供し判断は任せると逃げ切ってしまうと、何も考えないで終わってしまう。そこが難しいと思います。偏った情報、あいまいな情報を学習者がどのように判断しているのか介入しないと、学習者は固定的なイメージを持ち続けてしまうと思うのですが。
- むしろ、情報をきっかけに考えてほしい。文化に関する情報や知識をどのように読むか、学習者それぞれの立場から意見を言うことによって、さまざまに話し

合うべきことが浮かび上がってくると思います。世界の出来事、新聞記事などを教材として扱う場合、読み取るだけでなく、どう思うか、あなたならどうするか、なぜ日本でニュースになるなか、など自分の視点でという部分を大切にしたらどうでしょうか。

対話で考えたのは、「スムーズな理解」や「円滑なコミュニケーションのためのビジネス情報」という考え方には、日本人のやり方を受け入れ、日本人のようにふるまう期待があるということである。さまざまな情報に対して批判的に読みとき、このような期待をはねつける学習者があるかもしれないが、そうでない場合、異なる文化を受容しなければならぬという脅威を感じとるだろう。「発想」の押し付けを避けるには、担当者自身も学習者と対等な立場で担当者個人としての考え方を発言し、情報を素材にいっしょに考えていくことが必要ではないかと思う。

■ 3. 最終結論

3.1. 文化を学ぶとは

ビジネスパーソンは来日前、また来日直後に「日本の社会」「日本のビジネス習慣」などさまざまな「日本」に関する情報に触れ、日本人ビジネスマンや日本企業のイメージを持っている。特に、日本の経済低迷と企業文化に対するメディアの批判をそのまま発言しているようにも思える。学習者が発言する「日本」や「日本人」に対する否定的な認識は、必ずしも非難ではなく、さまざまな情報を自明とするのではなく、批判的（クリティカル）に異なる社会を捉える途上にあるという見方がある。学習者のイメージは、来日後、社会活動を通して修正、更新されることもあるだろうが、固定的なイメージが強化されたり、日本語の学習における教師・学習者という関係性の中で、教師の画一的な見方が一方向的に押し付けられ、学習者が個別に持つ視点を覆い隠してしまう危険性がある。

「文化を学ぶ」とは、「日本的なやり方」として既にある前提や常識を受け入れるこ

とではなく、自らの視点で試行錯誤しながら、イメージを検証し、異なる社会の本当の姿を見出すプロセスと考えられる。このような「文化を学ぶ」方法は、学習者がすでに母文化の教育を通して獲得しているのかもしれないが、日本語を学習する人たちが新たに学ぶことは、異なる社会にあって、異なる考えを持つ他者との対人相互作用の中で、自分の捉えた認識を日本語という言語でいかに表現化するかというコミュニケーション活動と考える。

3.2. なぜ、ことばの学習は「生きる力」になるか

世界を移動し、異なる社会で仕事をするビジネスピープルが必要としているのは、仕事に関わる人々とのさまざまな食い違いや摩擦を超えて、仕事のプロセス、価値、そして目的を共有する信頼関係を粘り強く作り上げ、お互いに学びながら問題解決していく力だと思う。学習者は異なる他者に接し、自己の中にある固有の認識を自覚し、自己が自己らしくあることを問いつつ、他者との対人相互作用を経て、拒絶と受容の間を揺れながら、新たな他者の視点を取り込んだ自己へと変容していくと考えられる。

学習者が第2言語として日本語を学ぶのは、異なる他者とのコミュニケーション活動の中で表現したいことが表現できる自己になっていくという自己表明のためであろう。担当者は、異なる社会で「もがいている」学習者の視点に注目し、学習者の問題意識を自覚化、言語化するプロセスで、学習者が異なる他者のほんとう姿を掴む力を育成することができると思う。ことばによる表現と理解のコミュニケーション活動を通して学習者に育成されるのは、自己の捉えた認識を表現し、さまざまな情報を自らの視点で検証し、他者とお互いに学び合う人間関係を作る力である。

筆者の小さな問題意識は、ビジネスピープルの教室の実践を通して起こったが、「学びとは何か」という広い視野から小さな問題意識を見る時、新たな視点が与えられる。ビジネスピープル、地域の定住者、留学生などの日本語学習者は、ビジネス、学生、生活者という属性、かかわる場面は異なるが、文化の学びは、社会活動の特性という枠組みを越えて、自己と異なる世界を生きる他者を出会わせ、摩擦や葛藤がコミュニ

ケーションを促し、より深く他者を理解する人の成長のカリキュラムと考えられる。そして、筆者自身もその学びの中に置かれていることに気づくのである。私にとって日本語教育は、異なる他者に自己表明する表現活動を通して、他者と対人相互関係を作り、異なる社会で生きる力を育てることと捉えることができる。

■ 4. 感想 — レポートを書いて

二つの動機文を書いた。筆者の混沌とした問題意識をもやっとした思考のままことばにした第一稿と、教室担当者としての問題意識を伝えようとした第二稿はどちらも私の問題意識ではあるが、明確に説明できなかった。しかし、外言化されたことばの本質に迫ろうとするコメント者の存在によって、意識は再び脳内を駆け巡り、さまざまに取り込まれたものに問い、最後に自分自身の問題意識が、関連した2つの問いであると一応の整理できたことがもっともうれしかった。ことばを伝えるために思考を総動員する学習者である筆者にとって、コメント者は忍耐強く学習者の意識に寄り添い、ことばを生み出すことをサポートするファシリテーターであったと思う。

所属する機関で同じ教室を担当している対話者とは、日本語教育についてさまざまに話しているが、「文化」という視点から教室活動について話すのははじめてだった。対話では、共有している考え方を強化できたこともあるが、対話によってはじめて気づいた認識の違いもある。教室の担当者は、各々が持っている教育学習観に反論したり、受け入れたりしながら、共有するものを見つけていく過程で、担当者の日本語教育に向き合う各々の「文化」を学んでいるといえるのだろう。そのような意味で、対話者Tさんの日本語教育に向き合う姿勢を深く理解できたように思う。

動機文と動機内容をめぐる対話による相互作用は、対話する両者が何を発見しているかを相互に学び、問題解決するために協働的にかかわる関係を生み出すただ中に筆者があることを自覚させた。この関係の力によって、自分の考えていることが揺さぶられ、より明確になり、さらに考え続けること、さらにことばにすることへと方向付

けられた。その結果、学習者の「日本・日本人」に対する否定的な認識は異なる他者への批判的、検証的アプローチの途上にある認識と捉えることができた。また、「学びとは何か」という大きな問題意識から見ると、ことばの学習は人と人が出会い、相互に影響を与え合い、人間の理解と成長につながる学びであると気づいたことが、このレポートを書いて感じる成果である。